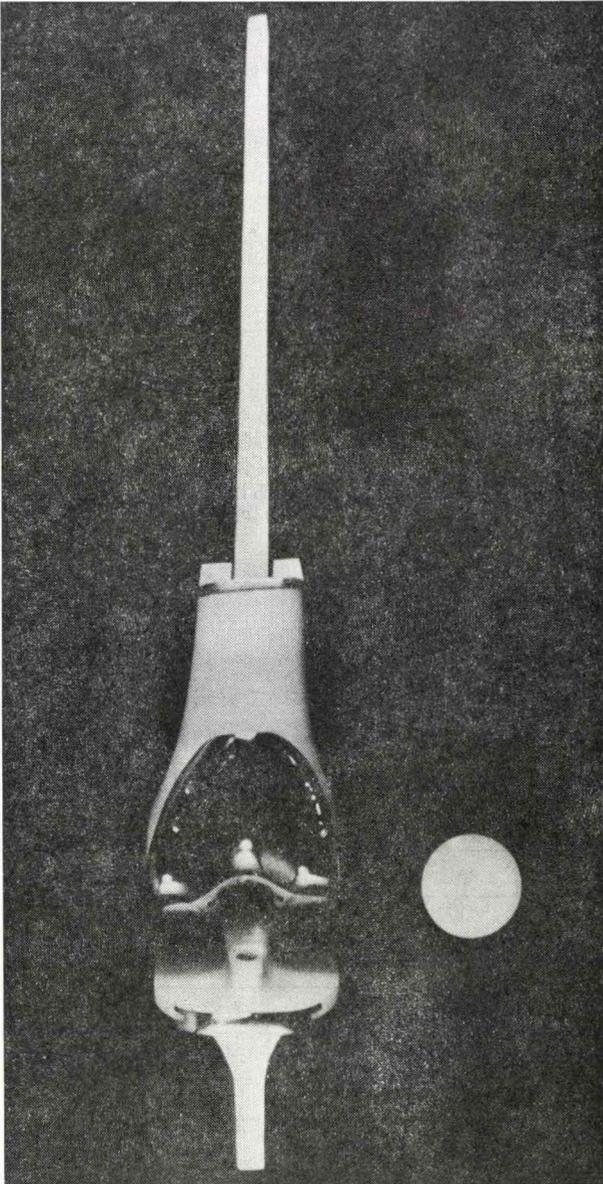


京大広報

No. 212

京都大学広報委員会



非蝶番型人工膝関節—関連記事本文95ページ—

目次

昭和56年度入学者選抜学力試験	
(第2次学力検査)の実施	94
医療技術短期大学部の入学試験の実施	94
生島遼一名誉教授が日本芸術院賞を受賞	95
<紹介>	
医用高分子研究センター	95
<随想>	
万国博のころ 名誉教授 米谷榮二	97
白浜海の家の開設	98
計報・日誌	98

<大学の動き>

昭和56年度入学者選抜学力試験
(第2次学力検査)の実施

昭和56年度第2次学力検査は、本広報 No.210 に掲載した実施計画のとおり、3月4日(水)と5日(木)の両日にわたって実施された。受験状況は次のとおりである。

合格者の発表は、3月18日(水)の午後、学部ごとに行なわれる予定である。

なお、学力検査の実施にあたり、試験当日(3月4日、5日)の学内における禁止行為と入構の制限について、3月3日に総長名で掲示がなされた。



3月4日、法経第4番教室

た。

学 部	募 集 人 員	志 願 者 数	受 験 者 数	欠 席 率
	人	人	人	%
文 学 部	200	747	732	2.0
教 育 学 部	50	217	215	0.9
法 学 部	330	839	815	2.9
経 済 学 部	200	680	672	1.2
理 学 部	281	843	816	3.2
医 学 部	120	363	346	4.7
薬 学 部	80	160	159	0.6
工 学 部	945	1,800	1,779	1.2
農 学 部	300	583	571	2.1
計	2,506	6,232	6,105	2.0

(注) 1. 「志願者数」のうち、法・経済・理学部は第1段階選抜合格者の数である。
2. 「受験者数」と「欠席率」は、最終日(文・教育・法・経済学部は外国語、理・医・薬・工・農学部は理科)のものである。

医療技術短期大学の
入学試験の実施

医療技術短期大学部では、3月4日(水)と5日(木)の両日にわたって、昭和56年度の入学試

験を京都女子大学において実施した。実施状況は下表のとおりである。

なお、合格者の発表は3月16日(月)の午後行なわれる予定である。

学科・専攻科	募集人員	志願者数	受験者数	倍 率	試 験 期 日	教 科
看 護 学 科 (3年制)	人 80	人 116 (128)	人 95 (117)	倍 1.2	3月4日(水)	数学・外国語・国語
					〃 5日(木)	理科
衛 生 技 術 学 科 (3年制)	40	325 (33)	284 (24)	7.1	3月4日(水)	数学・外国語・国語
					〃 5日(木)	理科
専攻科助産学特別 専攻(1年制)	20	65	58	2.9	3月5日(木)	看護学・外国語

(注) 「志願者数」及び「受験者数」欄の下段()内は第二志望の志願者及び受験者の数(外数)を示す。

(医療技術短期大学部)

生島遼一名誉教授が 日本芸術院賞を受賞

このたび、生島遼一名誉教授に日本芸術院賞が授与されることになった。授賞式は6月1日に日本芸術院で行なわれる予定である。

以下に同名誉教授の略歴及び業績等を紹介する。

生島名誉教授は大阪市出身、昭和4年京都帝国大学文学部文学科を卒業、神戸商業大学（のち神戸経済大学、現在の神戸大学）

予科教授、第三高等学校教授を経て、昭和25年京都大学分校

（のち教養部）教授に就任、昭和39年文学部教授に転じ、昭和43年停年退官されるまでフランス語学フランス文学講座を担当

して、後進の育成に努められた。昭和43年京都大学名誉教授、昭和50年には勲3等旭日中綬章を受けられている。この間、日本フランス語フランス文学会関西支部長、同学会副会長などの要職を歴任された。

同名誉教授の研究、評論、翻訳の業績は、17世紀古典主義文学から、19世紀リアリズム文学を経て20世紀ヌーヴォー・ロマンにいたるまで近代・現代フランス文学史をあまねく覆いつくし、またその論考の対象は、ただ単にフランス文学だけにとどまらず、広く日本の文学、能、版画にまでも及んでいる。同名誉教授の薫陶を受け、あるいはその文業の影響を受けたフランス文学者、評論家、翻訳家は数知れないほどである。

同名誉教授の数ある訳業のひとつの中心は、スタンダードであるが、およそ若い日に外国文学に



興味をもったことのある人間で、生島・桑原両名誉教授の協力になる岩波文庫『赤と黒』のページに目を通したことのない者は稀であろう。この『赤と黒』にはじまり、『パルムの僧院』、『アルマンス』、『イタリア年代記』、『ラミエル』、『恋愛論』等々の名訳は、今日すべて『スタンダード全集』全12巻に収録されている。

与謝野晶子による現代語訳『源氏物語』の文体を範として実現されたフランス17世紀の女流文人ラファイエット夫人『クレーヴの奥方』の翻訳は、日本語の翻訳の文章を芸術的創作の文体にまで高めた業績であったが、この翻訳における新しいスタイルの創出は、フロベール『ボヴァリー夫人』、『感情教育』、バルザック『幻滅』、デュマ『三銃士』等々の19世紀文学の訳業にも、ラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』、ブルースト『失われた時を求めて』、ボーヴォワール『第二の性』、チボーデ『小説の美学』等々の20世紀小説・評論の訳業にもひとしく認められるところである。

さらに同名誉教授の研究に関してのべれば、フランスの近代・現代小説群を視野の中心とし、同時に日本の小説までもその展望のうちに収めた多年の研究の蘊蓄は、『フランス小説の「探求」』と『日本の小説』のうちにあまねく披歴されている。

京都大学停年退官後も、同名誉教授の旺盛な執筆活動はいささかも衰えることなく、『水中花』、『蜃気楼』のエッセー・評論集が次々と刊行され、今年はさらにひき続いて『鴨涯日々』の上梓が予定されている。

もし同名誉教授の活躍がなければ、今日の日本のフランス文学界はありえなかったというべきであろう。（文学部）

<紹介>

医用高分子研究センター

現代の科学の進歩は、人体の組織や臓器の病巣を人工の材料によって置換したり、あるいは老朽・変形した組織や臓器の機能を人工組織や人工臓器によって代用することを可能にした。例えば、現在、実地臨床に使用されているものでは、人工関節・人工骨・人工腱・人工血管・人工心弁・人

工皮膚・歯科材料などがあり、近い将来に臨床応用が可能となると思われるものには、人工心臓・人工腎臓・人工角膜・人工気管などが考えられる。しかし、これらの材料には現在の強い社会的あるいは医学的要請に迫られて用いられているものもあり、その形態・機能・耐久性などの面でなお多くの問題を残している。これらの問題を解決するとともに、より優れた新しい材料や人工臓器を開発するためには、その研究が従来のような

科学の細分化された領域で別々になされるよりも、もっと学際的な研究の場で総合的になされる方がより速かに効果的にその成果があらわれてくるであろう。

本学では昭和46年に MPE (medical polymer engineering) 研究会が工・医・理・農学部出身の有志により結成され、今日までに数十回にわたる研究会を開催した。昭和49年には本学医学部に医用材料学講座が開設され、また昭和53年には京都大学医用高分子研究会が設立されるなど、学内における医用材料開発に関する研究熱は急速に高まってきた。さらに昭和51年には文部省科学研究費補助金による総合研究「医用高分子に関する基礎的研究」が、また昭和52年には同課題の特定研究が行なわれたが、これではなお不十分であり、理学・工学・医学・歯学などの各領域の専門家が一つにまとまった研究の場において学際的な研究を進める必要があるということが明らかとなった。

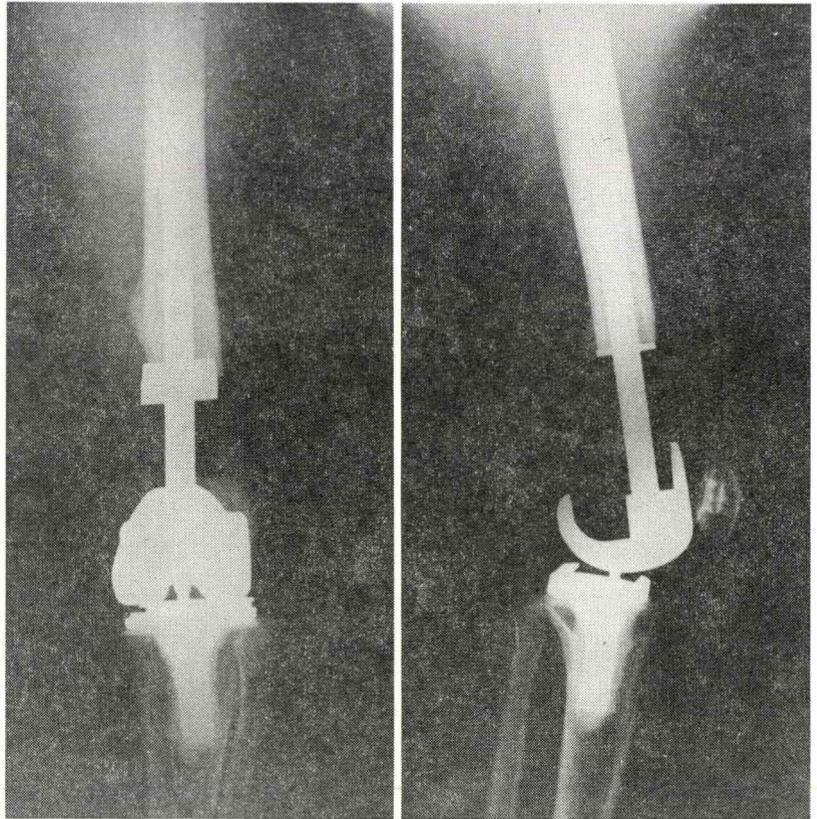
以上のような理由から、医用材料や人工臓器開発の本格的な研究組織として本学に医用高分子研究センターが昭和55年4月に設置された。本研究センターの目的は各領域の専門家が集って生体材料 (biomaterial) の合成、その物性テスト、機能テスト、成形および組み立て、動物実験などを経て臨床応用に至るまでの一連の研究を総合的に行なうことにある。昭和55年度には材料物性研究領域と歯科材料応用研究領域とが設けられ、定員6名の教官(教授1, 助教授2, 助手3)により研究活動を開始した。昭和56年度には材料合成研究領域と機能性高分子研究領域(客員)が認められることとなり、教官2名(教授1, 助教授1)と客

員教授1名とが増員される予定である。

なお、当初計画した実験外科研究領域と人工臓器研究領域が昭和57年度以降に増設されれば、医学部附属病院西部構内のウイルス研究所東側に隣接して研究棟を建築し、これをもって一応本研究センター設置計画が完成することとなる。現在は工学部と医学部附属病院の一部を借り受けて研究を行なっているが、一日も早くこの計画が実現することを念願している。

現在の研究内容は生体に応用しうる高分子材料の分子構造、組織構造、界面構造、機械的性質などの検索や歯科材料、人工骨材料、人工関節材料の開発、人工気管支、人工血管の臨床応用などが主であるが、来年度以降は新しい生体材料の分子設計や天然高分子材料の化学的修正、機能性高分子の開発、それらの材料の組織親和性や機能的適合性の検索などが研究領域として新しくつけ加えられることとなろう。

(医用高分子研究センター)



膝の関節軟骨を破壊した骨腫瘍に対して分節的広範切除の後に人工関節で置換し大腿骨側は金属性のシステムに硬質ポリエチレン (HDP) をかぶせ関節面を金属性とした実例のX線像

白浜海の家の開設

本学の学生および教職員の厚生施設として、白浜海の家を下記のとおり開設しますので、利用してください。この海の家は、三段壁をはじめ千畳敷、円月島など風光明媚な南紀白浜にあり、海に近く、夏季は海水浴に最適のところです。

なお、建物は木造平家建（居室は、和室で3室）で、収容定員は35名です。

記

1. 名 称 京都大学白浜海の家
2. 所 在 地 和歌山県西牟婁郡白浜町
京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内
(交通機関) 国鉄紀勢線「白浜駅」下車、明光バス「明光バス本社前」行に

乗車、終点で「臨海」行バスに
乗換えて、「臨海」下車

3. 開設期間 4月1日(水)から9月10日(木)まで。
4. 申込み 体育会事務室(西部構内総合体育館内)
5. 所要経費 1人1泊使用料50円、ほかに食費等実費程度
6. 備 考 海の家のある理学部附属瀬戸臨海実験所構内には、500種以上の海の生物を集めた水族館があり、公開されています。(有料)

なお、詳細は体育会事務室(電話学内2574)に照会してください。

(学生部)

計 報

蜷川 虎三(本学名誉教授・経済学博士)
2月27日逝去、84歳。本学経済学部卒。昭和14年本学経済学部教授就任、同21年退官。その間評議員(昭和16

年~20年)、経済学部長(昭和20年~21年)を歴任。昭和19年勲3等瑞宝章。専門は統計学。

日 誌

(1981年2月1日~2月28日)

- | | |
|----------------------|-------------------|
| 2月3日 大学院審議会 | 10日 建築委員会 |
| ◇ 防災研究所研究発表講演会(4日まで) | 18日 国際交流委員会 |
| 6日 同和問題委員会 | 20日 放射性同位元素等管理委員会 |
| ◇ 安全委員会 | 23日 組換えDNA実験安全委員会 |
| 10日 評議会 | 28日 発明審議委員会 |